

国際文化交流イベントによる学生の学び ～在名古屋カナダ領事館とのリモート講演会～

瀬戸 敦子、吉水 淑雄

2020年7月、岐阜女子大学（以下、本学とする）では観光・英語専修学生を中心に国際文化交流イベントを実施した。当日の司会やスケジュール管理などは全て学生が主体的に行ったものである。

コロナ禍の現在、対面での講演会などは軒並み中止または延期となっている。そのような状況下において実施されたリモート講演会の企画・実施は、with コロナ、アフターコロナの日本社会、とくに観光業界への就職を目指す学生にとって重要な学びであったことが学生アンケートの結果から分かった。

1. はじめに

本学文化創造学部文化創造学科観光・英語専修専門科目「交流文化史」の授業の一貫として実施された国際文化交流イベント「在名古屋カナダ領事館リモート講演会」は、当授業ゲストティーチャーである、ぎふ善意通訳ガイドネットワーク会長河合雅子氏の応援のもと実施された。

当イベントは、コロナ禍で行われた国際文化交流イベントであり、リモート¹で開催された初めての実践であったことから、本稿では実施に至るまでの過程および学生の学びを報告したい。

2. 専門科目「交流文化史」

観光・英語専修では、卒業後観光産業に従事する上で欠かすことのできない多くの資格を取得し、ホテルや旅館での実習や観光施設での研究調査を重ね、観光ツアー企画やイベントの提案が出来る人材育成を目指す。

表1は、当専修が行なう実践的学修を含む授業の一覧である。本論で取り上げる授業科目交流文化史は、3年次前期に開講される。

表1 観光・英語専修の実践的学修を含む授業

開講年次	授業名
1年	フィールドワーク演習Ⅰ
1年	観光学総論（学部共通科目）
1年	観光ビジネス論（学部共通科目）
2年	小京都論
2年	観光地づくりと学習
2年	レクリエーション概論及び実習（学部共通科目）
3年	フィールドワーク演習Ⅱ
3年	インバウンド概論
3年	テーマパーク演習
3年	観光地理Ⅲ
3年	交流文化史
3年	イベントプランニング

(1) 授業目標

交流文化史の授業到達目標は、以下の通りである。

①グローバル社会が進展する世界で、国際人として必要なスキルを学び、日本文化のみならず他国の文化、習慣を尊重しつつ講義では基礎力を、現場では世界の変化への対応が出来る判断力とマナーを修得する。社会生活の基礎として求められる思考力、協調性や責任感、コミュニケーション力を身に付ける。

②観光をキーワードに、日本と他国の文化交流がどのように行われてきたのか、日本文化は外国人の視点ではどのように捉えられているかを学ぶ。

(2) 2020年度の授業計画

2020年度交流文化史の授業計画は、表2である。2020年度の履修学生は、観光・英

語専修の3年生4名、4年生1名の計5名であった。

表2 交流文化史 授業計画

1	ガイダンス
2	岐阜県の観光戦略と訪日外国人へのおもてなし
3	日本人の海外旅行史
4	ぎふ長良川鵜飼の観光
5	ぎふ長良川鵜飼の歴史と海外の鵜飼
6	鵜飼をみた外国人
7	桜がつなぐ日米文化交流
8	日本の桜と英国の桜
9	岐阜県とカナダの国際交流
10	カナダの観光政策
11	
12	国際文化交流イベント準備
13	
14	国際文化交流イベント実施
15	国際文化交流イベントを終えて

学生らは、国際観光資源のなかでも、日本を代表する桜や岐阜を代表する鵜飼が海外ではどのように認識されているかを学んだ上で、岐阜県とカナダとの国際交流事情やカナダの観光資源、観光施設について学修した。

なお国際文化交流イベントは15時間のうち5時間分を充当した。

3. 在名古屋カナダ領事館とのリモート講演会までの取り組み

(1) 事前学修

事前学修として位置づけたのは、表2の「岐阜県とカナダの国際交流」、「カナダの観光政策」である。授業は、ゲストティーチャーの河合雅子氏が担当した。



図1 事前学修の様子

岐阜県、岐阜市は2018年12月28日にカナダを相手国としたホストタウンに登録

され、カナダのサンダーベイ市と姉妹都市提携を締結していることをきっかけとし、2020年東京五輪へ向けて、スポーツや文化など幅広い分野でカナダとの交流を進めている。岐阜県、岐阜市とカナダとの国際文化交流事業においてこれまでの実体験をもとにしながら、講義は行われた。

授業内では、相手に分かりやすく聞き取りやすい「美しい日本語」の修得方法を学んだり、発信する力を養うためにカナダの自然、文化、歴史、教育、観光といったテーマごとにプレゼンテーションを行ったりした。



図2 準備作業の様子

加えて、在名古屋カナダ領事館領事シェニエ・ラサール氏の著書『ラサール領事のなごや日記』を読み、日本とカナダの違いについて議論を行った。印象に残った箇所が学生個々で異なり、ある学生はバレンタインデーが日本とカナダでは違うことを知り、なぜ異なるのかを調べ発表する者もいた。

(2) 在名古屋カナダ領事館とのリモート講演会の概要

①講演会の主旨

将来国内外の観光客をおもてなしする観光産業への就職を目指す観光・英語専修の学生にとって、他国のことを学ぶ、知ることは日本、日本人を知ることでもある。当講演会ではラサール氏の出身国であるカナダの文化や習慣を学びながら、日本文化との違い、そして国際交流の在り方について学び、考える。

②講演会当日までの準備

7月13日講演会へ向けて、6月上旬から授業時間及び空き時間、放課後の時間を活

用して準備を行った。学生が主体的に行った準備は、以下の通りである。

- スケジュール作成
- ポスター作成
- 広報活動（新聞会社、テレビ局など）
- 講演会代表者、司会などの担当者決め
- 講演資料印刷、配布

その他、担当教員が行ったのは、

- 在名古屋カナダ領事館リモート講演会の担当者齋藤氏とのスケジュール調整および講演内容確認
- リモート講演で必要な機材の準備、撮影である。

「遠隔での交流会となると、双方の表情が分かりづらく、感謝の気持ちを届けにくい」、「せっかく参加してくれる学生に、参加したという実感を味わってもらいたい」という意見が学生から出たため、講演会終盤に参加学生、教員全員でメッセージボードを作成し、カメラ越しに表示することとした。



図3 リモート講演会ポスター

③講演会来賓者および参加者

- 在名古屋カナダ領事館
領事兼通商代表 シェニエ・ラサール氏
遠隔対応 齋藤 麻子氏
- ぎふ善意通訳ガイドネットワーク会長
河合 雅子氏
- 岐阜県商工労働部観光国際局

国際交流課 課長 恩田英彦氏

- 岐阜市ぎふ魅力づくり推進部
国際交流推進審議監兼国際課長
伊藤恵里氏

- 岐阜市ぎふ魅力づくり推進部
国際課ホストタウン推進室
武山慎也氏

-岐阜女子大学 学長 松川禮子

- 岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科
観光・英語専修 瀬戸敦子
同 吉水淑雄
同 山中マーガレット
同 安藤義久
同 松家鮎美
同 河原俊昭
初等教育学専攻 齋藤陽子

-岐阜新聞社、中日新聞社

交流文化史履修学生 5 名、その他観光・英語専修学生 10 名（2、3、4 年生）、文化創造学専攻学生 12 名（3、4 年生）の計 27 名が参加した。

④講演会当日の様子

リモート講演会は、2020 年 7 月 13 日月曜日、11 時から 12 時 30 分で本学と在名古屋カナダ領事館とを Web 会議サービス Zoom を使って繋ぎ行われた。

講演会は 11 時 20 分からであったが、運営する学生は、9 時 30 分から来賓者、参加者への配布資料の印刷作業、リモート回線確認、スピーチ練習などを行った。

講演会は、コーディネーターの河合雅子氏によるラサール領事の紹介からはじまり、その後領事による「日本とカナダの文化交流」というテーマで東海地方のインバウンド観光、身近な異文化交流としてコンビニで働く外国人について、領事自身の日本の印象など多岐に渡る内容で講演が進んだ。

講演後は、学生からの質疑応答の時間が設けられ、時間の関係から 3 名が質問を行った（図 5）。最後には、観光・英語専修 3 年代表者が英語でスピーチをし、その後参加者が日本語、英語そしてフランス語で書かれたメッセージボードを掲げ、感謝の気

持ちを伝えた（図6）。

表3 学生の感想



図4 講演会の様子



図5 ラサール領事へ質問する学生



図6 カメラ越しに感謝の気持ちを伝える学生

4. 在名古屋カナダ領事館とのリモート講演会を終えて

在名古屋カナダ領事館とのリモート講演を終え、交流文化史15回目の講義では、反省会を行った。なお、反省会にはコーディネーターの河合雅子氏も参加した。

講演会の準備から当日までの活動を通して学生から出た感想は表3である。

観光・英語専修で行う初めてのリモート講演会であったが、通信機能のトラブルもなく会を終えることができた。

<p>・もともと人前で話すのが苦手で、自分が司会を務められるかどうか心配でした。広い会場の後ろの席まで声を届けなくてはいけないというのを指導された時、とても緊張しました。しかし、何度か練習していくと、声を出すだけでなく、笑顔、声のトーン、話すスピードも大切にしないといけないのだと自分で気づけるようになってきました。</p>
<p>・私は当日受付を担当しました。下級生に短い時間の中で指示を出したり、参加者にメッセージボードの記入をお願いしたりとても忙しかったです。先生から声があったから動いてしまうことも多かったのですが、そこは今後に活かしたい部分です。主で動く学生だけが動くのではなく、私たち自身が周りを見て何をしなくちゃいけないのか、何を願ったら良いのか考えながら行動しないと気づきました。</p>
<p>・当初はコロナの影響もあり在名古屋カナダ領事館領事のお話を聴けるのかどうか心配でした。けれど先生方がリモートで講演会が出来るようおねがいでくださり、実現できたことはとても嬉しかったです。自分が司会兼学生代表となり、みんなをまとめなくてはならない立場になったとき、プレッシャーを感じました。本番に近づくと、時間はきちんと守れるか、的確な指示が出せるかなど不安な気持ちもありました。その不安な気持ちが変わったのは、本番前夜、家で司会の言葉を練習しているときです。ふと、「明日はきっと大丈夫だろう。リハールもやってきましたし、楽しもう」という気持ちになりました。当日は、緊張することなく終始リラックスしてできたと思います。短い期間で準備することは大変でしたが、チームワークで乗り越えられました。</p>
<p>・私は御礼の挨拶で学生代表として日本語・英語でスピーチをしました。心を込めてラサール領事に想いが伝わるよう家や学校で何度も練習しました。当日は、緊張して少し早いスピードになってしまったけれど、自分のベストを出すことができました。このスピーチをきっかけに、少し自信をつけることができたと思います。</p>

来賓者や参加者、教員からは「リモートでの講演会は参加意識が薄れてしまうことがあるが、今回の講演会は、メッセージボードを掲げ感謝の気持ちを伝えたり、質疑応答の時間が設けられたりと有意義な時間であった」、「身近な場所での国際交流を講演者の実体験をもとに聴くことができ楽しかった」という声があった。

5. おわりに

対面での講演会開催が困難な昨今、リモートでの講演会を実施し、企画運営を行った3年生の感想をもとに指導側から感じた成果を述べたい。

当イベントは、交流文化史の授業の一環として行われたものである。当授業の達成目標2点の中でも、このイベント企画、運営で学生に期待したのは、

- ①日本文化のみならず他国の文化、習慣を尊重する姿勢を養う
- ②社会生活の基礎として求められる思考力、

協調性や責任感、コミュニケーション力を身に付ける

③日本文化は外国人の視点ではどのように捉えられているか学ぶの3点であった。

リモートでの国際文化交流実施が決まり、限られた時間のなかで学生らは、自分たちだけが学び、交流を楽しむだけでなく、他の参加者にも同じように国際交流の楽しさと面白さを感じてもらえるよう考えを出し合った。人前で話すことに苦手意識のある学生もいた。英語でのスピーチに消極的な学生もいた。

しかしながら、講演会当日まで学生は話し合いと練習を重ねてきた。話し合いの中では、「できること」と「やりたいこと」が異なり、戸惑い、意見が衝突したこともあった。リーダーを中心にしながらひとつひとつ準備を進めてきた点を評価したい。

学生は、with コロナ時代に常に前進し続ける、やれる範囲の中で最大限のパフォーマンスが求められる観光産業への就職を目指している。この活動を一つのきっかけにし、今後の実践学修に励んでほしい。

また、今後も在名古屋カナダ領事館との国際文化交流を継続し、持続的、発展的実践学修を行っていきたいと考えている。



図7 大使領事の一字書展²⁾ ラサール領事の作品『癒』を観覧する学生

「自国の文化知り、発信を」

在名古屋カナダ領事館のシエニエ・ラサール領事兼 通商代表のリモート講演が 13日、岐阜市太郎丸の岐阜女子大であり、文化創造学部女子大であり、文化創造学部の学生に「自国の文化を知り、世界へ発信しよう」と呼び掛けた。

講演ではラサール領事の著書を利用して、学生が気が付かない日本の文化を知ってもらおうと向大が企画した。

ラサール領事は1994年に南山大(名古屋市の留学生として来日。2004年まで日本企業で勤務した後、16年に領事として再び来日した。

領事館からリモートで参加したラサール領事は、関西圏を訪れた際に外国人観光客の多さに驚いた経験を踏まえ「中部圏にもっと外国人旅行者が訪れるよう『ビールが大切』と提言。カナダの文化や日本との共通点なども紹介した。

講演後には松川慶子学長が「領事のチャレンジ精神旺盛な生き方を学んでほしい」と学生にエールを送り、文化創造学部3年の野方杏珠さんは「国際交流できる仕事を目標している。今回の講演を将来につなげていきたい」と話した。

図8 岐阜新聞 2020年7月14日

在名古屋領事・ラサールさん 遠隔授業でカナダ文化 岐阜女子大生に伝える

在名古屋カナダ領事のシエニエ・ラサールさんが13日、ビデオ会議システムを用いた遠隔授業で、岐阜女子大(岐阜市太郎丸)の学生六十人にカナダの文化などを伝えた。写真。

同大文化創造学部で観光や英語を専攻する三年生を対象にした講義「交流文化史」の一環。留学や会社勤めの経験を含めて通算十年以上日本で暮らすラサールさんは、カナダの食文化や産業を紹介した後、日本の印象について話した。

昔に比べコンビニなどサービス業での労働者に外国人が増えたと感じるといい「こうして日本の習慣に親しんだ人々が、外国とのギャップを埋める役割を果たしてくれるのでは」と話した。

(形田怜央菜)

図9 中日新聞 2020年7月18日

謝辞

本論において報告した、在名古屋カナダ領事館とのリモート講演会実施は、領事兼通商代表のシェニエ・ラサール様はじめ遠隔通信の設定をご担当頂いた齋藤麻子様にご理解ご協力いただき行うことができました。

また、講演会のコーディネーター、事前学修ではゲストティーチャーとしてご教授いただいた、ぎふ善意通訳ガイドネットワーク会長河合雅子様にも多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献および URL

シェニエ・ラサール (2020), 『ラサール領

¹ リモートとは、物理的に分離されており、通信回線などのネットワークによって接続された状態のことである。

² ぎふ善意通訳ガイドネットワークが主催した書展。岐阜県と交流の深いカナダ、ア

事のなごや日記』, 中日新聞社

吉水淑雄・瀬戸敦子 (2020), 「岐阜女子大学・長良川鉄道株式会社地域連携企画の成果と課題～観光列車「ながら」イベント企画を通して～」, 『岐阜女子大学文化情報研究』 Vol.21, No.2

岐阜市役所国際課ホームページ (2020.2.8 最終閲覧)

<https://www.city.gifu.lg.jp/36155.htm>

岐阜県庁地域スポーツ課スポーツ交流係ホームページ (2020.2.8 最終閲覧)

<https://www.pref.gifu.lg.jp/site/pressrelease/61920.html>

メリカ、モロッコ、リトアニアの大使や領事らの書道作品を展示。2020年8月24日から9月11日まで十六銀行本店ロビーギャラリーにて開催した。